

---

# リアル・ゲーム

多田間

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

リアル・ゲーム

### 【Nコード】

N5212BA

### 【作者名】

多田間

### 【あらすじ】

裕樹はただの平凡な男子だった。しかし高校の始業式で、彼は一つのゲームを渡され、大きく人生が変わることとなる。裕樹は命がけのゲームをクリアすることができるのか？

## 序章

俺、高伊裕樹たかいゆうきは成績が悪い。小学生の時は受験勉強をしていたからテストで100点を連発していたが、受験に受かって大学までエスカレーターエスカレーターの私立の中学校に通い始めてからは成績はどんどん落ちていき、中学の卒業が危ういほどだった。必死の努力で何とか高校に進学し、今日4月15日はその入学式だ。周りには同じ制服を着た生徒がちらほら見える。

俺は川のそばの桜並木を通って春らしい風に当たりながらのんびりと歩いていた。学校まではそう遠くないし時間にも余裕がある。遅刻することはないだろう。そう思いながら舞い散る桜を眺める。この桜並木は町の中でも特にきれいで、お花見にも何回も来たことがある。

ここ、大見市は俺の生まれ育った町だ。そんなに大きな町というわけではないが、町から出なくてもたいいていの買い物は済ませることがができる。遊ぶところもあって退屈することはない。

「平和だなあ」

と、口に出してみる。この町は本当に事件などがほとんどおきない。地震や火事も一度も起きたことがないのだ。そんな町だからこそ俺は好きなんだけどな。

高校生活もどうか平和でありますように、と心で念じながら歩みを続ける。そんな中、俺の背後から声が聞こえてきた。

「ちょっと、ユウ！　なんで置いてくのよー！」

振り返ると走ってきたらしく、ぜいぜい言いながら話しかけてくる女子がいた。

髪はショートカットで肩に触れるか触れないかぐらいの茶色がかった黒。頭の右側にピンク色の髪留めをしているが、どうやら寝起きのようで髪があちこちではねている。目は大きく顔だちも整って

いて、猫耳がよく似合いそう。身長は俺より少し低い程度でほとんど同じだ。身体はほっそりとしていてスカートからのぞく足はとても白い。ただ1つ、胸が足りないのが惜しい所だ。別に俺は巨乳とかに興味はないがな。

「そりゃあんだだけ幸せそうに寝てたら起こす気も失せるさ。枕しっかり抱いてよだれ垂らしながら『もう放さないんだからね』とか言ってたぞ」

どういう意味か、そして枕はいつたい何の変わりだったのかは知らないが。

「なっ！！ うー、それでも置いていくことはないじゃない！」

といいながら顔を真っ赤にして俺が歩き出すとその隣についてきた。

彼女の名前は高野紗友莉<sup>たかのさゆり</sup>。俺の……幼馴染、というか生まれた時からずっと一緒にいるので、もはや赤子馴染みである。生まれた日も、病院も同じ。幼稚園、小学校と全て同じクラスで席も必ず前後か左右。遊ぶ時も必ず隣にいて、お風呂も一緒だった。さすがに小6で恥じらいを覚えたが、普通は長くても小2までが限界だ。よく12歳まで一緒に入れたと思う。

そして塾に入り、中学受験も一緒に受けて奇跡的にも合格。中学生になっても小学生の時ほどではないがやはり一緒にいることが多かった。

とにかく何をするにもそばにいたやつだ。それは高校生になっても変わることがないだろう。

「サユももう高校生なんだから目覚まし無しで起きれるようになれよ」

口にしてみたがよく考えたら今のセリフは女の子が男の子に言うもんじゃないか？

「うう、イジワルだよー。私が朝に弱いのは知ってるでしょ？ ……」

それに一緒に登校したいし」

そう言われるとなにも言い返せなくなるじゃないか。どうも少し

上目使いでこちらを見てくる顔に俺は弱いらしい。

15年もの間見てきた顔だが、やはり「かわいい」の部類に入るのだろう。しかしなぜか一度も告白されたなどという話を聞いたことがない。

「わかったよ、これからはちゃんと起こしてやる。ただし、自分で起きられるように努力はしておけよ?」

サユは夜10時にはちゃんと寝るのになぜか身長は伸びないし、朝は寝ぼける。中学生の時は直そうとしていたが途中であきらめたらしい。

速さをサユに合わせて桜並木を歩く。するとサユはつぶやくように言った。

「……高校生活はどんなことが待ってるのかなあ」

「今までと変わらないさ。きつと楽しい時間を過ごさせるよ」

そう答えながら歩く。

俺は本当にこの町はこれからもずっと平和なんだろうと思っていた。でもそれは幻想にすぎなかった。

今日の学校の始業式で、俺は命がけのゲームに巻き込まれることとなった。

## 序章（後書き）

どうも、とうまです。別の作品をほったらかしにして新しい小説の序章を書くというとんでもないことをしかした男です。今回は結構まじめな話にしようと思いますのでどうか温かい目で見守っていただけると幸いです。

追申、「なんで毎回毎回幼馴染が出てくるんだ！」だって？そんなもん幼馴染属性は神だからに決まってるだろうが！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5212ba/>

---

リアル・ゲーム

2012年1月14日13時53分発行